

坂東巡礼の体験研究

佐藤久光

A Study of Experience in Bandho Pilgrimage

Hisamitsu SATO

はじめに

二十世紀末から今世紀にかけて四国八十八カ所を巡る遍路の数は急激に増加し、それに比例するかの如く、遍路を体験した巡拝記の出版が相次いでいる。その背景には、定年退職を機に発起した人や自己を見つめ直す人、あるいは殺伐とした世相の中で遍路に安らぎを求める人と様々であるが、その体験の感動を伝えたいという強い願望がある。

それに対して、観音巡礼の西国巡礼や秩父巡礼は、最近の傾向として年間の総数も減少し、且つ巡拝記の出版なども極めて少ない。本稿では観音巡礼の動態的研究の一つとして、巡礼を実践している人々の内面的な側面に視点を当てた考察を行なうことにする。その事例に関東一円に展開する坂東巡礼を取り上げる。

一 研究の目的

巡礼、遍路に関する出版物は古くから数多くある。その多くは案内記や体験記である。最も古いものには応保元年（一一六一）に西国巡礼をした三井寺の僧覚忠が寺院名と本尊名を記した記録（『寺門高僧記』巻六）である。四国遍路では江戸時代の承応年間に、智積院の悔焉房澄禅がその行程や札所寺院、本尊などを綴った『四国遍路日記』が知られている。それ以後、沙門宥弁真念の『四国邊路道指南』などの案内記が出版され、それまでは僧侶の修行とされた遍路が民衆に普及するきっかけになった。

西国巡礼の出版物は江戸時代には縁起類、靈驗記、道中絵図が多く発行されている。それに比べると、坂東巡礼に関する出版物は量的にはるかに少なく、坂東だけを編集した単独出版は極めて少ない¹⁾。その中にあって、沙門亮盛の『坂東観音霊場記』は最初の坂東霊場の案内記で注目さ

れる。現代に入ってもその数は少なく、平幡良雄師の『坂東観音巡礼』が案内書として好評を得ている。それ以外には清水谷孝尚師の『観音巡礼―坂東札所めぐり―』、『巡礼と御詠歌―観音信仰へのひとつの道標』、『坂東33カ所』、坂東札所会編『坂東三十三所観音巡礼』などとその数は少ない。その上、庶民が巡拝した体験を記したものは皆無に等しいといつてよい。

坂東巡礼に関する出版物の少ない理由としては次のようなことが指摘できる。その第一は、坂東霊場は広範囲に展開し、かつては関八州と呼ばれ、今では一都六県にわたる行程が三百二十里（一、二八〇キロ）と長く、且つ難路もあり、それを一巡するには苦勞が多く、満願する人が少なかった点である。そのため坂東巡礼をする人の中には三十三カ所を全部廻らずに、「区間巡拝」をして満願とするのも稀ではなかった。

今一つは、坂東巡礼の置かれた立場である。坂東巡礼の成立は鎌倉初期とされ、将軍源頼朝や妻政子、及び家臣たちによる観音信仰が影響し、西国巡礼を関東地方に移植したものであった。その結果、巡礼の原型は西国巡礼であり、坂東巡礼の独自性が発揮できなかった点にある。いわば、坂東巡礼は独自に完結した巡礼ではなく、百観音巡礼の一部として位置付けられてきたことである。そのため、坂東巡礼の巡礼者の数が少ないことや、全札所を廻らないこと、百観音巡礼の一部としての位置付けなどが出版物や巡拝記の少ない理由と言える。

坂東巡礼に関する歴史的資料、文献が少なく、その実態はこれまで殆どわからなかった。それを打開するために、筆者は平成四年から五年にかけて巡礼者にアンケート調査を実施、それを分析したことによって全体像を把握できるようになった²⁾。その論考は統計的研究を中心としたものであった。本稿では、坂東巡礼のより詳しい分析をするために、先の調査とは別にその後巡礼者に個別の調査を実施した。それをもとに巡礼に出かけた動機、契機、その目的、巡礼途上の心境、交通手段など考

察することを目的とする。坂東巡礼の特異性とその位置付けは、現代の巡礼の実態とも密接に関連することから、本論に先立ち坂東霊場の成立とその特異性を述べることにする。

二 坂東巡礼の成立とその特異性

観音巡礼の原型は西国三十三カ所巡礼であるが、その成立は平安末期の十二世紀頃と考えられる。西国巡礼は庶民に人気が高く、大いに賑わっていた。しかし、西国巡礼へ出かけるには治安面や経済力などを考えると誰しもができるものではなかった。そこで西国以外の各地に霊場が移植され出した。その代表的な霊場が坂東霊場であった。その背景には源氏が関東に幕府を開き、源頼朝を始め武士階級が京の宗教文化を摂取し、それを鎌倉を中心とした関東に根づかせたことが挙げられる。

その坂東巡礼はいつ頃からどのようにして始まったのか、その成立状況を見てみることにする。坂東巡礼の創設を伝える縁起類は幾つか挙げられる。例えば、明和八年（一七七一）の沙門亮盛による『坂東観音霊場記』（全十巻）には「花山法皇坂東巡礼始行之事³⁾」として、

法皇那智山ヲ出テ、大和ノ長谷寺ニ入り、諸国行脚ノ御願ヲ立テ、
 …（中略）正暦元年庚寅ノ春、初メテ鎌倉ヘ下向アリ。仏眼上人ヲ
 御先達トシテ坂東八州ヲ巡礼シタマヘリ（後略）

と述べられている。これは正暦元年（九九〇）に仏眼上人を先達に花山法皇が初めて坂東巡礼をした、と伝えるものである。しかし、縁起類の内容には大いに疑問があり、清水谷孝尚師は『坂東観音霊場記』は永禄三年（一五六〇）の『杉本寺縁起』を書写したものであると指摘している⁴⁾。鶴岡静夫氏も「花山法皇が関東にこられたということはたしかかな文獻に見当たらないし、坂東札所を定めたという形跡は全くない⁵⁾」と述べ、花山法皇説を否定している。

史実として坂東巡礼の成立を確かめるとすれば、その有力な資料に福

島県東白川郡棚倉町八槻の都々古別神社の十一面観音像の台座裏に残る墨書銘が挙げられる。その墨書銘には次のように書かれている。⁽⁶⁾

敬白

奉造立

十一面観世音菩薩像

右成弁修行三十三所観音

霊地之間於八溝山観音堂

上院參籠三百ヶ日之次萌

兆具道僧当社別当之拾

一面大和国長谷之

本仏之威儀所奉造立之状如件

天福二年七月十九日

願主 別当小僧都意

上求并沙門成弁

この銘の内容は、僧成弁が三十三カ所観音霊地を修行中、八溝山観音堂に三百日間参籠した時、都々古別神社の別当の願いにより、大和国・長谷寺の十一面観音像を模して造立したことを記したものである。この八溝山観音堂が日輪寺であり、後の坂東第二十一番札所にあたることから、この霊場は坂東三十三所霊場であったことを示すものであると考えられる。⁽⁷⁾昭和九年に刊行された『埼玉県史』第三卷では沙門成弁の銘文を根拠に、坂東巡礼の成立を次のように述べている。⁽⁸⁾

磐城国東白川郡近津村八槻の国幣中社都々古別神社に蔵する十一面観音の木像には、沙門成弁なるものが、天福二年七月に三十三所霊場修行を為し、其の札所の一なる常陸国久慈郡八溝山日輪寺に於て此の像を造立せし旨の墨書銘あれば、少なくとも天福二年には既に坂東札所の成立せしことは確実である。(中略)坂東札所が已に此の時に存在せしものとすれば、其の起源は之より以前に遡ると見ね

ばならず、恐らくは当代初期に成立を見たと解すべきである。

このように都々古別神社にある観音像の銘文を根拠にすると、坂東霊場の成立は天福二年(一二三四)以前の十三世紀初期に遡ることができ

る。ところで、都々古別神社の観音像の銘文から天福二年以前に坂東札所が成立していたと考えられるが、霊場成立の背景を検討すると、鎌倉初期の成立の見解には説得力が出てくる。鶴岡静夫氏は坂東観音札所の成立、背景について幾つかの要因を挙げて鎌倉期に制定されたとする見解を述べている。⁽⁹⁾それによると、第一に、鎌倉に幕府を開いた源頼朝や妻政子、娘大姫たちは篤く観音信仰に帰依し、度々観音寺院に参詣し、その影響が強かったことである。『吾妻鏡』によれば、⁽¹⁰⁾建久三年(一一九二)三月二十三日条に「幕下岩殿観音堂に御参」とあり、頼朝が岩殿寺の観音堂に参詣したことが述べられている。翌建久四年の八月二十九日条には「御台所、岩殿観音堂に詣で給ふ」、九月十八日条には「將軍家岩殿大藏等の両観音堂に詣でしめ給ふ」とあり、頼朝と妻政子が岩殿寺の観音堂に参詣していることがわかる。頼朝は上洛した折りにも、石清水や清水寺に参詣していた。『吾妻鏡』の建久六年四月三日条には、「將軍家并に御台所姫君等、密々に石清水以下の霊地を巡礼し給ふと云々」とあり、六月十八日条にも「御台所姫公等、密々に清水寺以下の霊地を巡礼せしめ給ふと云々」と書かれおり、將軍家は家族で観音信仰に深く帰依していたことがわかる。將軍家の観音信仰は三代將軍実朝にも受け継がれた。『吾妻鏡』の元久二年(一二〇五)四月八日条には「將軍家鎌倉中の諸堂を巡礼し給ふ」と書かれている。建暦元年(一二一一)五月十八日条には「御台所岩殿観音堂に御参、武州扈從すと云々」とあり、実朝の妻の参詣を伝えている。翌建暦二年九月十八日条には、「將軍家岩殿相本等の観音堂に御参と云々」とも書かれている。更に同年十二月二十九日条には、「將軍家故右幕下の法花堂以下、諸堂に巡礼し給ふ。

相州、遠江右近大夫將監等供奉す」とある。

將軍家の篤い観音信仰に加え、御家人たちもその感化を受け、観音寺院に参詣をしている。『吾妻鏡』の元久元年四月十八日条には、「將軍家御夢想の告に依り、岩殿観音堂に参り給ふ。遠州并に四郎、五郎等の主、及び広元朝臣以下、扈從雲霞の如し」と書かれ、家臣たちも將軍に見習って観音信仰をしていたことが窺い知れる。このように將軍家や御家人たちが畿内で人気のあった観音巡礼に感化され、それを東国に持ち帰り、普及させようとした状況が見られる。

第二に、関八州に広がる札所間の関連性を考えると、関東地方全体を統一できる統率力をもった人物がいなければ、一貫した巡礼が不可能であったことが指摘されている¹¹。その人物を想定するならば、政治的な権力を掌握し鎌倉幕府を開き、自身も熱心な観音信仰者であった源頼朝が考えられる。しかし、頼朝が坂東巡礼の成立に影響を与えたとは考えられるが、制定したという根拠は見つからない。相模国には三十三カ所のうち八カ寺があり、しかも札所一番を鎌倉の杉本寺をあて、八番札所までが相州であることから、幕府と深い関係にあった人物の存在があったと思われる。そこで、頼朝の時代と考えるよりも三代將軍実朝の時代に霊場が制定されたのではないかと推測される。その根拠の一つは、実朝は病弱であったことや、その姉大姫も病を患うなどで母政子が息災を祈って観音寺院に度々参詣した。実朝は親の観音信仰の影響を受けたことと、平家一門を滅ぼし、多くの殺生を犯した父頼朝の子として罪業意識を持ち続け、亡霊の供養のために観音寺院を度々参詣した。

参詣の仕方にも頼朝と実朝では違いが見られる。頼朝の参詣は一時に一カ寺で、病氣平癒や戦勝祈願などと明確な目的を持ったものであった。それに対して、実朝の参詣は、「諸堂に巡礼し給ふ」とか「岩殿根本等の観音堂に御参」とあるように、一時に数カ寺を巡拝し、しかも特定の目的を持たないものであった。このことから、実朝の参詣はいわば巡拝

に相当し、巡礼の形態の萌芽とみることができるとされる¹²。これが実朝の時代に巡礼が制定された根拠の一因ともされるところである。

坂東巡礼の創設が鎌倉時代に入ってからと見られる第三の根拠は、札所寺院と鎌倉幕府との関係である。鎌倉の寺院は頼朝が開府以後にできたものが多く、それらが札所に含まれている。相模以外の国にも頼朝と深く関わった寺院がある。第九番慈光寺は頼朝が奥州藤原泰衡を征伐する折りに参詣祈願し、その後も多額の寄進を受けている。第十四番弘明寺は源氏代々の祈願所であった。更に頼朝は建久三年五月八日の後白河法皇の四十九日法要に、相模の杉本寺、岩殿寺、弓削寺、光明寺に加え、慈光寺や浅草寺などの僧侶を多数集めている¹³。このことから、札所寺院は頼朝や源氏と深く関わった寺院が多く含まれている。

以上のように、坂東霊場が成立する背景を考えると、鎌倉に幕府が置かれてから天福二年までの鎌倉初期が妥当であるとみなされる。

次に、坂東巡礼の立地条件やその特徴に触れてみる。札所寺院は相模国が八カ寺と多く、しかも順路は鎌倉を始点として、終点の安房で札打ちを終え、鎌倉には船で戻るコースになっている。このことから鎌倉を中心とした巡礼であったと言える。しかしながら、相州以外の人にはその順路には無理があり、そのためにも一番から順番に廻ったとは言い難く、便宜性を重んじて個別的に変更して巡拝されていた。その理由は行程が長く、しかも地形が入組み、順番に廻るには不便であったことが挙げられる。沙門円宗は延享元年（一七四四）に著した『秩父三十四所観音霊験円通伝』で坂東巡礼に触れ、「坂東ハ、武蔵、相模、安房、上総ノ八州二度ル。其行路甚難シ¹⁴」と説明している。また沙門亮盛は『坂東観音霊場記』で、第三十三番札所・那古寺と第二十一番札所・八溝山日輪寺の難所について、「爾ニ那古ノ浜八溝ノ嶺ナドハ、一箇所ノ霊場ヲ拝スルニ、数日ノ間難所ヲ往返スルモ¹⁵」と記している。更に、第十七番札所・満願寺の御詠歌に巡礼の苦難が詠われている。

古里ヲハルト、コ、ニ立出ル 我カ行末ハイヅクナルラン
それを亮盛は次のように解説している。¹⁶⁾

我カ故郷ヲ出立ヨリ、遠ク此地ニ巡リ来レドモ、マダ札所ハ十七番
目ナレバ、笈摺ヲ解納ルノ那古マデハ、遙ノ路程ヲ経ルナラント、
山河ノ難所ニ疲労シテ、行先ヲ思ヒ歎息スル意ナルベシ

この御詠歌の原型は、西国第二番札所・紀三井寺の御詠歌「ふるさと
をはるばるここに紀三井寺 花のみやこもちかくなるらん」である。
「ふるさとをはるばるここに」の一節は共通しているが、都に近くなる
ことを期待した紀三井寺の御詠歌と、先行の長さに不安を抱く満願寺の
御詠歌では巡礼者の気持ちは大きく異なっている。

このように坂東巡礼は苦行的性格が強かったことから、順路の変更が
行われた。『坂東観音霊場記』では十七番札所から二十四番札所までの
順路について、「路次ノ難所ヲ除テ、十七番・十九番・十八番・廿一番・
廿二番・廿三番・廿番・廿四番ト巡ルナリ」と記している。また、十返
舎一九が著した『金草鞋』の第十編「坂東順礼」の順路も不規則である。
十返舎一九は、「西国順礼は、第一番より順に巡はれども、坂東はいろ
いろと入組み、順に巡はること難し¹⁸⁾」と述べ、第十四番札所・弘明
寺から始めて一番杉本寺、二番岩殿寺の順で廻り、その後も適宜に順番
を変え、最後は第十三番浅草寺で打ち終えている。

順路変更だけに留まらず、坂東巡礼は三十三カ所の札所を全部廻るの
ではなく、十数カ寺に留まる「区間巡礼」が行われ、札を納めない寺院
を残して「札納め」をしていたケースも珍しくなかった。

更に、坂東巡礼の特異性は坂東巡礼だけで完結するのではなく、秩父
巡礼や西国巡礼との関連である。関東にはその後、室町期に武州の一角
に秩父巡礼が起る。そして、坂東巡礼の途上で秩父巡礼を兼ねる巡拝
が起る。第一番杉本寺から出発し、第九番札所・慈光寺まで進み、そ
こから峠を越えて秩父に入り二泊三日で秩父霊場を廻り終え、坂東霊場



大井弾正の百カ所巡礼碑
(大永5年 長野県佐久市)



天文11年の百カ所巡礼の納札
(岩手県三陸町・新山神社)

の第十番札所・正法寺に戻り、坂東巡礼を再開するコースである。従っ
て、道中記にも『坂東三十三所道記』と『秩父三十四所道記』を合本し
た『坂東秩父六十七所道記』も登場する。清水谷孝尚師は、「それは坂
東巡礼が単独のままでは、存続し難かったことからとみられる²⁰⁾」と指摘
している。やがて室町時代末期になると坂東、秩父巡礼に西国巡礼を加
えた「百観音巡礼」の気運が出てくるにつれ、西国や陸奥からの巡礼者
も坂東巡礼に見られるようになる。新城常三博士は巡礼塔に触れて、坂
東巡礼及び秩父巡礼の単独の塔は比較的少ないのに対し、西国、坂東、
秩父百カ所巡礼塔が各地に圧倒的に多い、と指摘している。その上で、
江戸時代の坂東巡礼については次のように述べている。²²⁾

札所の個々の寺院は名刹で、地方的信仰対象として賑っていること
は明らかとしても、坂東巡礼の全体像は把握し難い。(中略) 主とし
て関東一円を中心とした東国の人々から成り立っていた。(中略)
坂東巡礼は、その数において、おそらく秩父巡礼に及ばず、比較的
低調であったであろう。

以上のように、坂東巡礼は鎌倉初期に西国巡礼を移植して成立したが、
関八州と広範囲にわたり、入組んだ道程で苦行性が高かった。そのため
低調であり、巡礼者の中には全部の札所を廻らないケースも稀ではなかつ
た。その結果、坂東巡礼が独自に存立するのではなく、秩父巡礼と合わ
せたり、更に西国巡礼とを加えた百観音巡礼としての一端と位置付けら
れてきた。その意味で、坂東巡礼は独自に存在する価値が薄かった。

三 巡礼の体験事例

さて、現代においても坂東巡礼は西国、秩父巡礼に比較すると低調である。しかし、江戸時代に指摘された苦行性に関して言えば、坂東巡礼より苦行性が強かったのは四国遍路であった。しかし、その四国遍路は古くから人気が高い。従って、坂東巡礼が低調な理由として考えられる点としては、都心から離れて分散している札所の立地条件と、坂東巡礼の独自性の薄いことが考えられる。

ところで、現在の坂東巡礼のミクロ的分析を行なうために、平成六年から七年かけて札所で巡拝者にアンケート用紙を配布し、それを郵送で回収した。アンケートの質問は巡礼に出かけた動機、契機、その目的及び感想を自由に記入する方法を採用した。その内容はいわば「巡拝ミニ手記」である。回答は六四人からあった。その事例の抜粋を紹介し、その後で分析、考察を加えることにする。

① 横浜市在住 女性 四十三歳

巡礼の動機は、平成四年十月にかわいがっていた甥が生まれつき心臓病で、三度の手術の甲斐なく十七歳で亡くなりました。その三カ月後に義母を、平成六年一月には実父を亡くし、悲しい思いが続きました。少しでも心が落ち着けばと思いい寺参りを始めました。平成五年三月に四国霊場第一番霊山寺から第二十三番薬王寺、五月に第二十四番最御崎寺から第五十九番国分寺まで参りました。近い内に八十八カ所を全部お参りし、最後に高野山金剛峰寺、奥の院にお礼参りして四国遍路を結願成就したいと思っています。

今年六月に坂東第一番杉本寺から第八番星谷寺をお参りし、八月に第九番慈光寺から第二十六番清滝寺まで参ってきました。我が家のお墓は第十四番弘明寺にあり、月一回お参りに行っていますが、弘明寺

にお墓があり幸せに思い先祖供養を大事にしてゆきたいと思っています。

② 横浜市在住 男性 六十五歳

昭和五十九年に不治とされる膠原病の強皮症になり、一時危篤の状態であったが、「ステロイド」によるショック療法で危機を脱しました。数年間免疫不全のために、入院を繰り返していた間、平成元年に結婚二年目の娘が病死し、小生の身代わりになったと多くの人々から言われました。

平成五年五月より秩父三十四観音を巡礼、全行程徒歩で延べ四日間で廻り終わり、般若心経は娘と父母とで一三二巻納経しました。

坂東は娘と父母並びに義父母と一六五巻納経を考えております。できるだけ近くの駅より歩くことにしております。又観音様の前で声を出して心経を唱えまして、納経所で納経をすませる。その時の気分は特に救われた感じがします。(中略)坂東巡礼を終われば西国三十三観音を巡礼したく考えております。歩くことで体調が安定してきており、毎月一回定期的に検査してもらっておりますが、医者も不思議がる程、強皮症は進行停止しております。

③ 埼玉県秩父郡横瀬町 夫六十二歳 妻五十八歳

「牛にひかれて善光寺参り」という諺がありますが、小生の場合は「家内にひかれて坂東参り」であります。家内はさておき小生は、信心の気持ちはあまりありませんが、ドライブ、又旅行の気分の付合いで廻って居ます。

地元の秩父札所めぐり、又十三仏参りは終了し、坂東巡礼を現在廻って居ます。西国札所巡礼も計画して居ますが、なかなか時間の都合がつかいません。

家内の信心は三年前、長男の難病の手術後（手術は成功、現在野球又ゴルフと普通の生活を送っている）から特に顕著となった様で、約三キロ離れた庚申尊へ毎日お賽銭をあげ、お線香をあげて居ます。

「苦しい時の神頼み」から始まったお寺参りも、現在は小生も積極的に計画し、車を走らせる様になりました。ただ、物事は最終的には、信じるものは自分自身であるという小生の考えは、家内の信心的考え方とは一寸相異している様です。手を合わせ無心の気持ちになるという事は良いことではないかと思っっている今日この頃です。

④ 神奈川県海老名市在住 夫五十九歳 妻五十四歳

昭和五十七年に四国巡礼を春夏の二回をかけて行なった。その時に西国、坂東、秩父も廻りたいと考えていたが、今年七月九日から十五日迄の七日間二七四（キロメートル）kmの西国巡礼を行なった。妻の健康上の願いもこめて般若心経の写経を一寺、一寺づつ納め、納経帖に御宝印を受けながら（会社の五日連続休暇制度に前後の土日を組み合わせて）、よし次は地元の坂東をということで八月八日から十一日迄の四日間で十四カ寺を廻った。あとは「一泊二日」を三回で廻るつもりでいるが、機会を早く作って廻りたいと思っています。

巡礼することは非常に楽しい。これからも色々な出会いを楽しみしながら夫婦で巡礼の旅を続けたいと思っっている。

⑤ 大阪市在住 男性 三十九歳

私は大学生の頃、四国へ友人と旅行した際に四国八十八カ所霊場の一部を観光しました。帰宅後、家が真言宗で八十八カ所とは宗派としてゆかりがあることと、お参りをしたことに父が良い印象をもっていたことを記憶しております。母が亡くなりました後、供養と思い、又今にして思えば父を安堵させることも願って一週間で四国を巡拝しま

した。檀家となっている寺の住職の勧めで軸に納経朱印を致しました。その後、ふとしたきっかけで西国三十三カ所を巡拝するようになり、廻り終えました。その途中で百カ所の観音霊場を巡る作法があることを知り、私としては迷いました。（中略）その目的だけで（西国は近いので休日を利用して廻れる意味）出向かねばならないことなど。でも母を供養する気持ちがそれらの煩わしさより高み（マ）にあることを自覚し始めました。

今、坂東を巡拝しておりますが、灯明し線香を立て手を合わせますが、私自身宗教に対する信心はありません。

⑥ 埼玉県浦和市（現さいたま市）在住 女性 五十七歳

私は現在まで在家出家の形をとっております。子供たちも成人し社会人となり数年たち落ち着いた状態になってまいりましたので、本当に自分自身の人生を生きたいと思っ完全な出家をすることに致しました。

今月二十五日から横川の行院に入りますので、その加護を願っての巡礼でございますので、全行程一人で電車を利用、バスは片道5km以上ある場合のみ利用、食事は湯、パン、又はおにぎり二個、果物一個としております。（中略）一人旅は仏との二人旅です。どなたにも心を開いてとらわれることなくお話ができますので辛いことや嫌な思いをしたことは一度もございません。

⑦ 埼玉県入間郡三芳町在住 夫三十歳 妻三十三歳

私は、信仰深いという訳でもなく、困った時の神頼みばかりする、単なる普通の人です。坂東巡礼に出かけるきっかけは、私の知人に七十歳を過ぎた老夫婦がいます。いつもニコニコしていて夫婦仲も良く、とても人生を楽しんでおります。その方たちから「秩父・坂東・西国

「巡礼」のお話を聞き、五年位前に私の両親が、秩父札所を巡礼し、掛軸を完成させました。真ん中に観音さまの優しい笑顔があり、とてもステキな物でした。

今回、私の家族（夫三十歳、長男三歳、長女二歳）を伴い巡礼に出かけるには、幾つかのお願いしたいこととか、悩みごとがありました。昨年の九月に義父が脳溢血で倒れ、未だに意識が戻りません。毎日義母と一緒に病院通いをしています。また主人も大工なのですが、平成元年より一級建築士の試験を受験しておりますが、あと一歩で合格には至っておりません。

生きている人を救ってくださるという観音巡礼に私は、ほんのちよつとだけ救いを求めたのです。いつの日か、坂東だけでなく秩父・西国の百観音を巡り、四国八十八カ所の霊場の巡礼に出かけ、自分を成長させたいと思っております。

⑧ 三重県鈴鹿市在住 男性 五十八歳

西国三十三所、四国八十八カ所札所を巡拝し、心の安らぎを覚え、次に坂東巡拝を志した。公務員である小生にとっては、早期に巡礼完了は期待できない。日時的に余裕がある時、少しずつあせらずにお参りしたいと思っている。一寺一寺、般若心経を唱えながら参拝している。時にはその土地の人情に触れることもあり、楽しい。

殆どの人が、ゴルフ場へ、海水浴へ、夏山へ海外へ、遊園地へと向かう中で、閑静な観音霊場で心を静め、自然の中に身を置くことは、格別の心境になる。昔を思い、自己を振り返るには一番よい場所だと考える。

⑨ 茨城県在住 男性 四十四歳

本年九月、友人に「坂東三十三霊場を廻らないか」と誘われ、仕事

柄泊まり勤務のため、非番、公休と暇が有り、しかも無趣味な自分にとってこれはおもしろそうだなと思い、現在十四カ所の霊場を車で巡りました。

私自身、神仏や宗教を崇拝している訳ではありませんし、これと言って目的は有りませんが、参拝することによって自然に願をかけると言ったところ。巡った感想としては、ひっそりと佇む霊場はどこにでもあるような寺と違って、何か心の安らぎすら感じられる。

⑩ 千葉県柏市在住 男性 五十一歳

巡礼の動機は、転勤出向きというサラリーマンとしての大きな節目を迎えた事、及びそれに伴って家庭内で若干のトラブルが生じた事。また定年までの残された時間や定年後の人生について何となく空虚な感じや疎外感を抱くようになった等、精神的に揺れていた。

目的としては、何かに打ち込めるものが欲しい。他人と一緒にではなく、自分一人で目的を持って進められるテーマが欲しい。私は同年代の中では珍しく（変人扱いすら受けるが）ゴルフをしないので、それに代わる足を使う運動をしたいなどである。

今春の坂東三十三カ所を結願に続いて、今秋も巡礼を行なっている途中ですが、春と秋とでは全く趣きが異なる風景に出会えて、「正しく季節の移り変わり」を実感している。

⑪ 東京都杉並区在住 夫五十五歳 妻五十二歳

巡礼に出かけようとした動機は、まず一昨年に秩父三十四カ所に出かけた折り、ハイキングを兼ねて週末毎に数回に分けて池袋からレッドアロー号に乗って夫婦二人で出かけました。回を重ねる毎に楽しさが増し、歩きながら道端の雑草や庭先の野菜や草花を見て、楽しい間に終わってしまいました。

昨年、の終わり、二週間近い主人の年末年始の休暇をどう過ごそうかと思案中、主人が坂東三十三カ所巡りの本を買って帰りました。よし今度は一年がかりでお参りしようと思いましたが、特に目的もなく、家族の健康をお願いするだけです。気候の良い季節、田舎の景色を眺めるだけでも楽しいものです。秩父と違い、場所も散っているので今回は車で、時には一泊で温泉につかりながら一年で終える予定です。四季折々の花が咲き乱れ、中年夫婦のレクレーションには最適だと思います。乗り気でなかった主人もゴルフを減らして次の計画を練っています。

⑫ 東京都三鷹市在住 夫四十三歳 妻四十歳

巡礼の目的 1 日本百観音巡りの一環 2 関東に残る古寺を求めて 3 家族との目標の同一化 4 休みの有効活用 5 体力の維持 (できるだけ歩くことによる) 6 古き時代の風習を実践することによる今後の生き方に自己啓発を促す

巡礼の感想 坂東三十三カ所は途中であるが、一昨年にオートバイで四国八十八カ所、そして八月二十四、二十五日の二日間で秩父三十四カ所を巡った。どちらも駆け足で一人での巡礼であったので、坂東はできるだけゆつくと電車、バス等も利用しながら、家族で廻ろうと思っている。

⑬ 宮城県名取市在住 夫五十七歳 妻五十二歳

観光を兼ねた巡礼。旅行の楽しみを取り入れた巡礼。ドライブを楽しみながらの巡礼。未知の神社、仏閣への期待感など。

ドライブ、旅行を兼ねた札所巡りなので、途中の名所・旧跡などを巡るのも楽しみの一つです。宿泊場所は各地の温泉旅館に決めており、湯にひたり、地酒を飲みながら、その土地の料理を味わうのが又

楽しみの一つです。もちろん、女房と二人三脚の旅である。

⑭ 名古屋市在住 女性 五十九歳

京都が好きでよく出掛けていました。納経のことを知り、観光を兼ねて形になる品を残せすし、次に出掛ける目的が決めやすい位の軽い気持ちで始めました(始 昭和四十三年一月三日 終 昭和五十五年八月二十九日)。西国の折りに百観音の本を読んでいます内に巡ってみたいと思いましたが、日帰りが出来ず西国巡礼も十二年もかかり、決心がつかせませんでした。東京に出掛けます機会があり、始めました。

巡礼の目的は、四十代は観光を兼ねて、五十代は信仰のためと思いましたが、六十代になります。目的は達成されません。(中略)私共の様に公共の乗り物を利用しては困難です。旅行社ツアー又は乗用車にて廻らないとだめですね。

追伸

去る四月三日、昭和六十一年より始めました坂東三十三カ所の旅は満願の寺十一番安楽寺で終わりました。

昭和六十一年五月二十二日 十四番弘明寺(東京泊)、二十三日 二番岩殿寺、一番杉本寺、三番安養寺(タクシー)、(江ノ電) 四番長谷寺、十三番浅草寺(東京泊)、昭和六十三年十月一日 十八番中禅寺(中禅寺温泉泊)、十月二日(タクシー) 十九番大谷寺、二十番西明寺、平成二年六月(乗用車) 七番光明寺、六番長谷寺、平成二年十月(タクシー) 二十八番龍止寺、(電車) 二十七番円福寺(犬吠泊)(タクシー) 三十一番笠森寺、清水寺、(電車) 那古寺(館山泊)(タクシー) 三十三番高蔵寺、(電車) 二十九番千葉寺 平成三年六月(タクシー) 十七番満願寺、(高崎泊)(タクシー) 十五番長谷寺、十六番水沢寺、(電車) 十二番慈恩寺、平成五年六月 初めて旅行社ツアー(名阪近鉄バ

ス)に参加しました。霊場の印象は少ないのが残念です。(中略)
 平成六年四月 五番勝福寺、(電車)八番星谷寺(黒山温泉泊)、九番
 慈光寺、(タクシー)十番正法性、十一番安楽寺

⑮ 横浜市港区在住 男性 六十歳

〔平成六年四月と十一月の二回の回答〕

巡礼の動機は、妻が昨年四月に癌の発病から三カ月で五十二歳で死亡したことであります。私が定年を迎えたら(八月に定年になる)二人で好きな山登りをしよう。またのんびり温泉にでも話しをしていた矢先の事でした。

葬儀を済ませ、訪ねて来る人も少なくなつて、家においても悲しみが増すばかりです。友人は気晴らしに「温泉にでも行ったら」と言ってくれますが、そんな気にはなれません。なぜならば、妻は今まであまり楽しみをせずに、子供の事ばかりを思って「つつましい生活」をしてきたからです。可哀想でなりません。懺悔の気持ちで一杯です。

そのうちにそうだ!「四国に行こう」と思うようになりました。四国には私と同じように悲しみをもった人が「おへんろ」としてお参りしていると聞いたことがあるので、実行することにしました。そうすればそのような人達と話しをすることにより「これからの生き方について何か得るものがあるだろう」と思ったからです。幸い登山で鍛えた丈夫な脚がある。昨年十月から四十日をかけて歩いてお参りしてきました。(中略)初めて歩いた「お四国」ですが、皆さんの親切に接した旅でした。また「人生は縁」を感じる旅でもありました。「四国」には「温かい人情と信心深い風土」があり、初めてのお遍路でしたが、何の不安もありませんでした。前置きが長くなりました。

さて、坂東の巡礼ですが、「四国を歩いた」から、(病み付きになりそうでもまた行きたいが)次は「百観音巡り」をしたい。(中略)坂東

は一都六県にまたがって点在しているので大変な行程となります。

(このため本当は秩父の後にしたかったのです)「四国」の時もそうでしたが、あまりお金を掛けないでお参りする。贅沢な事はしない。

お参りすることだけに専念する。これを基本に予算・日程を立てました。止む得ない所(日輪寺や高蔵観音・笠森観音への道)以外は宿泊

しないで日帰り、拘るようだが順番通りにお参りする。以下はその概略です。「札所の順番通り克明に時刻、交通手段、出費金額、感想などが記されているが、重要な点だけを摘記する。||引用者|」

◇一番から四番までは、白衣に和袈裟を掛けて家から鎌倉まで自転車
 で往復(四六km)を走り、お参りした。

◇五番から八番までは、青春18切符を使い、公共機関と歩きでお参りする。

◇九番から十二番までは、朝早く起きて仏壇にお参りしてから出発。

(中略)時計は十六時三十分になっている。お寺に電話を入れ、岩槻駅からタクシーで来るなら良いと云うことで承知して頂く。「四国」を含め巡礼で「初めてのタクシー」を使った。

◇二十六番までのまとめ。お参りはすべて「四国」の時と同じように、白衣で通している。ここまで白装束の人には一人として会わなかった。私は白衣を着ることによって自分自身に縛りを掛けている。

◇二十七番から二十九番(八月一日)四月以来中断していた巡礼の満願を目指して再開する。

◇那古観音に到着。いよいよ結願である。本堂では靴を脱ぎ、正座をしてお参りする。納経所で満願したことを伝える。するとここ那古寺で出している満願したという証を出してくれる。日付は八月三日である。私の満六十一歳の誕生日であった。記念すべき日である。

◇その後、八月末から七日間かけて「西国三十三カ所巡礼」の旅を始めました。現在十六番の清水寺までのお参りを済ませており、十七

番以降のお参りは十二月に行くこととしてあります。更に来年の三月頃に「秩父三十四カ所巡礼」を計画しています。〔平成七年に西国、秩父巡礼を済ませた続報が届く。〕引用者〕

◇費用集計（合計 六万六四六三円）

納経料 一万一〇〇円 入山料 一五五〇円 お賽銭 五八七円
交通費 四万一八〇円 食費 四七一八円 雑費 五八二八円

以上、坂東巡礼途上の人、及び満願した人から回答を得た手記を一五事例を紹介した。

四 事例の考察

全回答は六四例あったが、目的が明確でないものや、行楽を主眼とする人はアンケートの依頼を受けても記述内容が乏しい。その中から一五例を取り上げた。次に、これらの事例を通じて人々が巡礼に出かける動機、契機、その目的、及び心境、そして坂東巡礼の特徴などを検討してみることとする。

（一）巡礼の動機、契機

人が行動を起こすには、それなりの動機、契機が存在する。そこで巡礼という宗教的行為をするにあたって、果たしてどのような動機、契機があったかをみてみる。巡礼を志した動機、契機の代表例は家族の死亡や病气などが挙げられる。事例①②③④⑥⑦⑮などがそれに該当する。事例②は、本人が膠原病という難病を患い、苦しい思いを体験し、且つ結婚間もない娘を亡くす二重の不幸を経験している。子供の亡くした親として懺悔の念に駆られ巡礼を始めた。しかも写経を納経する手厚い巡拝を行なっている。事例①も短期間に甥と義母、実父を亡くす悲劇を体験している。これが巡礼に出かける契機になっている。

家族の不幸で切々とその心境を述べるのが事例⑮である。定年退職を

間近に控え、老後を妻と楽しく暮らそうと思っていた矢先、三カ月の入院で最愛の妻を癌で亡くした。その気持ちは悲しみと懺悔の気持ちであった。それを和らげようと、四国遍路に旅立ち、結願し、そして坂東巡礼を始めた。しかし、坂東巡礼を結願した後も、「なぜそんなに巡礼の旅をするのか？」と自問し、その答えを「日中は生活のために立ち振る舞っているのであまり意識しないが、夜床に就いたときなど空しさを感じます（人生の伴侶を失ったのですから）。そのような時に思いつくのが心の安らぎを求めた観音巡礼です」と綴っている。そして、「私も、もっと早くこの巡礼の旅を始めておけばよかったと悔やんでいます。だから家族であるいは夫婦でお参りしている人達をみると羨ましくなります」と締めくくっている。家族の中でも伴侶である妻を亡くした夫の心境が滲み出ている。掲載した事例以外にも夫や妻、親を亡くしたことが契機に巡礼を始めた事例は六例あった。その一例に三重県四日市の五十九歳の女性は次のように述べられている。

四年前に主人を亡くし、供養のため西国三十三カ所巡りを始めました。亡くなった一年間はお墓を建てることで費やしてしまい、次の一年間で西国三十三カ所の掛軸を仏前に供えることでした。悲しくて、毎日がむなしく自分を見失ってしまう程でしたが、一カ寺一カ寺を夢中で拝んで行くうちに心が静まる自分を発見することが出来ました。

この事例は夫の死で西国巡礼を廻り、その後には坂東巡礼を始めるようになったものである。また、妻に先立たれた八十三歳の男性も、「妻の冥福を祈ると共に生前尽くし得なかつた悔悟」で秩父巡礼を済ませ、坂東巡礼を始めている。

宗教へ入信する動機で家族の不幸を挙げるケースが最も多いことは各種調査で指摘されているが、巡礼の動機にも自身や家族の不幸が強力なインパクトになっている。

それ以外の動機、契機としては他人の影響がある。事例③の夫は妻の信心に触発されたもので、自ら「妻にひかれて坂東参り」と語っている。事例⑦は知人の老夫婦の百観音巡礼を聞いたのがきっかけであった。事例⑨は、無趣味な男性が友人に誘われて巡礼に出かけたケースである。また、母親が巡礼していたことを思い出し、母親の年齢に近い頃になるとお参りするケースもある。

(二) 巡礼の目的

巡礼の目的で多く挙げられるのは宗教的要素である。既述の動機との関連で、家族・親族を亡くしたり、病気などの不幸においては、死者供養や病氣回復の祈願が必然的に結びつく。併せて、伴侶や親しい人を失ったことで自分自身の精神的な救済を願う巡礼である。事例①②③⑦⑮などがその典型である。しかし、事例③や⑤の男性は、自身の心を信心ではないと、書き添えている。そこに宗教心の捉え方の難しさが横たわる。また事例⑥は熱心な信仰者であったが、子供も大きくなったので出家を志し、その修行の一端として巡礼を始めている。ただし、多くの人々は家族の健康、安全を念じながら参拝し、合掌しながらお経を唱えることで、心が落ち着き、爽快な気持ちになる、という指摘である。

巡礼の目的は、本来宗教的な目的であったが、江戸時代の中頃からは庶民が行楽を兼ねた巡礼も始まる。それは現代にも受け継がれている。そこで信仰以外の目的にはどのようなものがあるのか、既述の事例を中心に検討してみる。

その中で一般的な目的として、「精神的な志向」を求めるものが挙げられる。先の事例③⑤の男性を始め、⑧や⑨の事例では「心の安らぎを覚え」「何か心の安らぎすら感じる」とか、「閑静な観音霊場で心を静め、自然の中に身を置くことは、格別な心境になる」を述べているのがその例である。いわば特別に信心をしているのではないが、心の安らぎを巡礼に求めるものである。そこには、自然に佇む霊場寺院の静寂な環境と、

地方に残る人間の素朴な人情に接した感動がある。⑧の事例では「時にはその土地の人情に触れることもあり、楽しい」と述べている。事例⑪でも「特に目的もなく、家族の健康をお願いするだけです、気候の良い季節、田舎の景色を眺めるだけでも楽しいものです」の一節はそれによく物語っている。

我が国は、戦後高度経済成長で物質的に豊かになった。しかし、その反面、自然破壊や人間関係が希薄になり、殺伐とした社会になった。そこで、物質的な志向から精神的な志向へと転換し始めてきた。旧総理府の「国民生活に関する世論調査」では昭和五十四年頃から「心の豊かさ」を重視するという人が、「物の豊かさ」を重視する人を上回るようになった。平成期に入ると「心の豊かさ」を志向する割合が五〇%を超えた。そして平成十四年の内閣府の調査では「物の豊かさ」を重視する割合は過去最高の六〇・七%にまで達している。このようなデータが巡礼の目的にも反映している。

次に、巡礼の目的をより柔軟に捉え、行楽、レジャーとするタイプも少なからずある。事例⑪⑬はその例である。両事例とも夫婦で散策やドライブを兼ねた巡礼である。内容的には行楽に力点が置かれている傾向が見られる。特に事例⑬は温泉旅館に宿泊して名所を訪ね、土地の名産を味あうなど旅を満喫している。事例⑪でも「中年夫婦のレクリエーションには最適」と位置付けている。

江戸時代の庶民の巡礼では単に信仰を巡礼の目的とした訳ではなく、異国の見聞や、祭礼の見物も含まれるようになり、行楽的巡礼が増えてくる。それは西国、秩父巡礼では現在にも受け継がれているが、坂東巡礼では景勝地も少ないことから、行楽を主眼とする目的は極めて少ない。

近年の巡礼の目的としては、次の二つが注目される。その一つは、定年退職後の生き甲斐を見つける「目的探し」である。事例⑩は、「定年後の人生について：何か打ち込めるものが欲しかった」と述べている。

それ以外にも、茨城県常陸太田市の五十九歳の男性は、「退職後、余暇利用をどうするかと思っていたところ、『社寺巡り』をしてでも、時間をつぶそうかというのが初期の動機でした」とし、その後掛軸を見て「『観光を兼ねて掛軸作り』に変わっていった」と述べている。定年を目前にしたたり、退職後に巡礼を始めた事例には掲載した事例以外に四例ある。退職後の余暇利用は高齢化社会に突入した現在の日本社会を象徴している。若い時、仕事だけの人生を送った男性が定年後、老後の生き甲斐を模索せざるをえない。このような現代社会の状況で生き甲斐と健康を兼ねた巡礼が注目されている。

今一つは多目的の巡礼である。事例⑫では巡礼の目的を六つ、事例⑬は四つ挙げている。それ以外にも、「先祖供養と健康維持」「定年後の楽しみと、先祖供養、名所・名物の見物、購入」あるいは事例⑩の「足を使った運動をしたい」などと複数の目的を持っている場合が見られる。そこには、各自の思惑と同時に巡礼を多様な形に捉えようとする視点が出ている。

(三) 巡礼の形態

四国遍路では白装束に菅笠をかぶり、金剛杖をついて歩く遍路姿が象徴的であるが、坂東巡礼では果たしてどんな巡拝が見られるであろうか。既述の事例から幾つかの点を挙げてみる。最初に、巡拝手段である。現代の交通事情と広範囲に広がる立地条件を考えると、家用車の利用が一般的である。しかし、その中であって、電車、バスなどの公共機関を利用した巡拝も少なくない。事例⑥を始め、事例⑩などは公共機関の利用と徒歩を心懸けている。事例⑭と⑮ではその行程の交通手段が克明に書かれ、特に事例⑮ではタクシーを始めて使ったことと、参拝後に善意で乗用車に誘われた以外は電車、バス、徒歩で巡拝している。

次に、巡拝の仕方である。江戸時代から順番に廻ることは少なく、適宜に変更された。それは現在でもあてはまる。それを促進しているのは、

一番から順に三十三番までの「通し打ち」ではなく、「区間巡拝」の組み合わせにある。多くの巡礼者は日帰りや、一、二泊の予定で数カ寺を廻る。そのため、近い札所から打ち始め、随時日程を組み合わせている。その結果、事例⑭では結願は十一番安楽寺になっている。ただし、事例⑮は律義に順番に廻った希なケースである。なお、事例⑮において、札所の住職から聞いた話として、白装束で順番に歩いて「通し打ち」をしている巡礼者は極めて希である、と触れている。

(四) 坂東巡礼と他の巡礼、遍路との関連

最後に、坂東巡礼と西国、秩父巡礼及び四国遍路との関連をしてみる。既述した一五の事例の中には坂東巡礼以前に既に四国遍路や西国巡礼、秩父巡礼を結願、ないしは巡拝途中のケースが幾つかある。事例④⑤⑧⑫⑮の五例は既に四国遍路を終えている。事例①は四国遍路は途中まで行なっている。事例④⑤⑧⑫⑮は西国巡礼を済ませている。事例②③⑪⑫は秩父巡礼を終えている。更に今後の予定に坂東巡礼を済ませた後に他の巡礼に出かけたという希望、予定を述べるのが多い。事例⑮では、坂東巡礼が八月で結願し、西国、秩父巡礼を済ませ、「百観音巡礼」を達成している。既述の事例以外にも他の巡礼を終えたケースは九例あった。その中には、坂東札所二カ所を残し「百観音巡礼」達成寸前が二例ある。それらを集計すると坂東以外の巡礼を既に済ませている人は一九例に上る。

その結果、死者供養や信仰心の篤い人々は既に四国遍路や西国巡礼などを済ませ、その延長線に坂東巡礼を廻っていることが窺い知れる。しかも百観音巡礼を目指す人々も少なくない。また、坂東巡礼後に西国巡礼への希望をもっている人もある。従って、坂東巡礼を終えたらそれで巡礼は終わる、というものではなく、百観音巡礼、四国遍路へとつながるステップになっている。また、西国巡礼を済ませた人の中には百観音巡礼の一環として坂東、秩父巡礼に向くケースがある。

本稿の冒頭で、坂東巡礼の低調さの原因の一つに独自性の薄さを指摘したが、坂東巡礼をする人々の事例を分析すると、坂東巡礼で完結するのではなく、西国、秩父巡礼などを加えた百観音巡礼の中の一部としての位置付けが明らかになる。また、真摯な信仰心を抱く人には四国霊場へ巡拝するケースも少なくない。四国遍路に百観音を加え「百八十八カ所巡拝」を達成する人もある。

五 おわりに

日本三大観音巡礼の一つの坂東巡礼を取り上げ、巡礼途上及び結願後の手記を手懸かりに巡礼の動態を捉えた。それを通して坂東巡礼の特異性の一端が浮かび上がってくる。それは江戸時代から見られる順路の変更や「区間巡拝」が現在にも受け継がれ、「通し打ち」が少なく、日帰り巡拝による順路の変更である。また、坂東巡礼だけで完結せず、「百観音巡礼」の一部としての位置付けによる独自性の薄さが挙げられる。これらが西国、秩父巡礼に比べて低調な要因の原因とも考えられる。なお、坂東巡礼の低調な要因の今一つに東京都民たちは都下に移植された「多摩八十八カ所」や「多摩三十四カ所観音巡礼」や薬師巡り、不動明王巡りなどの地方霊場に人気が集まる点も見逃せない。

註

- (1) 清水谷孝尚 『観音巡礼―坂東札所めぐり―』三七三頁 文一出版 一九七一年。
- (2) 前田卓・佐藤久光「百観音巡礼(西国、坂東、秩父)の社会学的考察―坂東、秩父巡礼を中心として」『現代の断面』関西大学経済・政治研究所 研究双書第九十三 一九九五年
- (3) 『坂東観音霊場記』(国立公文書館蔵)及び『続豊山全書』第二十卷 一〇頁 続豊山全書刊行会 一九七一年。

- (4) 清水谷孝尚 前掲書 四五九頁。
- (5) 鶴岡静夫『増改訂版 関東古代寺院の研究』四八四頁 弘文堂 一九八八年。
- (6) 藤田定興「八溝山信仰と近津修験」(山岳宗教史研究叢書8『日光山と関東修験』)二七七―二七八頁 名著出版 一九七九年。
- (7) 藤田定興 前掲論文 二七八頁。新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』四六七頁 塙書房 一九八二年。
- (8) 『埼玉県史』第三卷 三四―三四二頁 埼玉県 一九三四年。
- (9) 鶴岡静夫 前掲書 四八二―四九三頁。
- (10) 訳注・龍肅『吾妻鏡』(三)、(四) 岩波書店 一九四〇―四一年。
- (11) 鶴岡静夫 前掲書 四八三頁。
- (12) 鶴岡静夫 前掲書 四九二頁。
- (13) 鶴岡静夫 前掲書 四八五頁。
- (14) 『秩父三十四所観音霊験円通伝』(慈眼寺蔵)、及び『新訂増補埼玉叢書』第三 七三頁 一九七〇年。
- (15) 『続豊山全書』第二十卷 一一頁。
- (16) 同書 八五―八六頁。
- (17) 同書 一一四頁。
- (18) 十返舎一九『金草鞋』第十編坂東順礼(関西大学図書館蔵)
- (19) 岡倉捷郎「三山参りと札所巡礼」『あしなが』191輯 一〇―一一頁 一九八五年。
- (20) 清水谷孝尚 前掲書 三七七頁。
- (21) 新城常三 前掲書 一一〇八頁。
- (22) 新城常三 前掲書 一一〇四頁。